

ラッキィーガールは中学生！



第9回言の葉大賞®で最優秀特別賞を受賞した土屋真優さんの『私はラッキィーガール！』は、身体に障害を持つて生まれた小学六年生の女の子の気持ちや未来への希望が、等身大の言葉で綴られた作品でした。中学生になった土屋さんに、お母さんと一緒にお会いして、作品には書かれなかった背景や、学校生活、ご家族について話してもらいました。

土屋真優さん(右)とお母さんの由美子さん

姉妹で受賞

実は、二〇一八年発表の第8回言の葉大賞®で、真優さんの二歳違いのお姉さん・凜々子さんも最優秀賞を受賞しています。このときのテーマは『生き抜く力』を

感じた瞬間』で、凜々子さんの作品のタイトルは『妹の「生き抜く力」』でした。凜々子さんは真優さんのことについて書いていたのです。

改めて真優さんと凜々子さんの作品を続けて読んでみると、姉妹二人の作品が呼応しているのがよく分かります。同時に真優さんの強さ、気負わず自然体で自分のありのままを受け入れ、成長していく姿が伝わってきます。是非、二作続けてお読みください。

第9回言の葉大賞® 最優秀特別賞

私はラッキィーガール

岐阜市立三里小学校 土屋 真優

私は小学六年生。毎日楽しく小学校に通っています。両親は私が生まれた時、今の私を想像できなかったそうです。それには理由があります。私には左手がありません。手首から先がないので、腕がついているだけ、と表現する方が伝わりやすいかもしれません。

生まれつき左手の障害を持った私は、今のところ日常生活で不自由を感じることはほとんどありません。みんなと同じようにできなくても『少しの工夫』でほとんど同じようにできています。学校の友達、先生、まわりの人達も優しく、何か困ったことがあると助けてくれます。

まだ私が二才位だった時、私の左手を見た外国人の方から、『She is a lucky girl!』と、笑顔ではなしかけられたことがあるそうです。障害は個性といわれることはありませんが、『ラッキィーガール』という言葉聞いて母は『障害IIかわいそう』ではなく『ラッキィー』と受け止めてくれる人がいらっしやるのがとてもうれしかった、と言っています。

私には、かなえない夢があります。行きたい場所、なりたい職業、やってみたいこと。どれも、まわりの人よりも二倍、三倍の努力が必要です。夢をかなえるための目標を立て、目の前にある目標を達成しながら少しずつ夢に近づいて、いつか夢をかなえたいです。

これからも、たくさんの人に助けをもらうことになると思います。しかし、日々の努力と感謝の気持ちを忘れず、いつか私と同じような障害を持った人が私を見て、元氣になれたり自信が持てるような、『ラッキィーガール』になりたいです。

妹の「生き抜く力」

南山中学校女子部

土屋 凜々子

「お姉ちゃん、お願いがあるんだけど…」

私が小学校四年生、妹が小学校二年生の春、めずらしく妹が真面目な顔で話しかけてきた。内容は、妹には左手に障がいがあり左手がない。新しく入った一年生の子からジロジロ見られたり、ヒソヒソ言われたりする事が嫌だ、というものだった。

妹は一年生の時、全校生徒の前に出て校長先生から左手の障がいの事を説明してもらっていた。そのことにより、妹の左手の事を知らない生徒はほぼいなかった。新学年になり、新一年生は妹の障がいを知らないのでジロジロ見ってしまう。当たり前だと思ふ。私も体の一部がない人を見かけたら一瞬でも「あれっ」と思ふ、見てしまうだろう。妹は自分の障がいを知らない一年生の子から見られることをとてもつらく思っていたそう。二年生に

なっってから校長先生からの説明はしてもらうことになったが、その時点ではまだだされていなかった。

妹から話を聞き、その日のうちに、自分の担任の先生に伝えた。すると校長先生へ話がいき、すぐ全校集会を開いて妹の説明をして下さった。それからの妹は一年生の頃と同様に楽しく通っていた。校長先生からの説明も毎年春になり、新一年生が学校生活に慣れたころ行ってもらっていた。

私は妹が毎日楽しそうに通学していたので左手のことをジロジロ見られても気にしていないのだろうと思っていた。しかし、そんなことはなく悲しい思いを私に打ち明けてくれた。校長先生にお話をしてもらったことで、妹は楽しい学校生活を送ることができたのだろう。そんな妹も五年生。今年からは何を言われても自分で説明する、と言って、校長先生には説明してもらっていないそう。

まわりの人に自分のことを知ってもらおう事、誰かに助けを求めることができる事、誰かのために行動できる事、誰かのために行動できる事、「生きぬく力」とは何か彼女の姿から学んだ。

毎日楽しく通っています

真優さんは、現在名古屋市内にある私立の中高一貫校、愛知淑徳中学校の一年

生。取材日は一学期の期末試験が終わったところで、爽やかな制服姿を見せてくれました。

『言の葉大賞』の受賞作では、真優さん

が小学校に「毎日楽しく通学」していると、お姉さんも真優さん自身も書いていました。が、中学校も「楽しく通っています」とはにかむような笑顔で答えた真優



授賞式にて 柿本実行委員長からインタビュー

さんです。お姉ちゃんが幼稚園に行ってしまうと、自分も家の外に出たいから「保育園につれていって」と泣いて騒ぐくらいでした」とお母さんの由美子さん。結構やんちゃな一面があるようです。

岐阜市立三里小学校

真優さんの母校・岐阜市立三里小学校は、言葉の授業に熱心に取り組んでいて、『言の葉大賞』にも学校から応募して頂きました。夏休みの宿題で選択肢の一つだったということですが、他にもユニークな宿題が出るそうです。「宝物をひとつ作りましょう」という宿題で、工作でも手芸でも自由研究でも何でも良いので、オリジナルの宝物を作る宿題だそうです。夏休みが明けると発表会や展示があるそうで、児童たちが工夫をこらして作るのだとか。

二〇一六年の熊本地震の際には同じ「みさと」という読みの熊本県美里町の小学校に防災頭巾や本を贈ったそうです。「お返しに折り紙をちぎってくまモンの絵をくれました」と真優さん。美里町との交流の中で本物のくまモンも訪ねてきたそうです。



授賞式では京都大学の山極総長の隣で記念撮影

仲良し?!家族

作品を読んだ印象で、お互いを認め合う、仲の良い姉妹のように思い、家庭での様子を尋ねると、真優さんとお母さんが顔を見合わせてニヤリ。「妹はお姉ちゃんが大好きなんですけど、姉の方は「それは片思いだね」とか言って、家では結構ドライなんですよ」とお母さん。

そんな姉妹は二人そろって赤ちゃんの時から「パパっ子」だそうです。お父さんのどういうところが好きなのか尋ねると「なんか好き」という答え。無条件に好きなんだそうです。やはり仲の良い一家なのだと感じました。

さん。好きな教科は数学で、期末試験も「数学だけいい結果のような気がする」と自己申告していました。部活動は初心者ながら囲碁部に入って、新しいことにチャレンジしているそうです。

ここまで聞くと「おとなしい人なのか」と思われるかもしれませんが、ところが「この子は小さいときから外が好きな子だっ

かなえたい夢

真優さんの作品に「私には、かなえたい夢があります」という一文がありました。その夢とは具体的には何なのか尋ねてみました。「あまりに立派な授賞式だったのでドキドキだった」という授賞式インタビューでは、答えを聞き出せなかったのです。

「お医者さんになりたいんです。お父さんがお医者さんだからというのもあるけど、社会科の教科書で、アフリカで飢餓に苦しんでいる人を見て、お医者さんになったら助けられるかな、と思って」と言う真優さんに、理由までは知らなかったお母さんも驚いていました。お姉さんの凛々子さんも「お医者さんになりたい」と言っていたそうですが、社会で活躍している同窓生の話が学校で聴いて帰ってからは「弁護士もいいな」と言っているとか。

真優さんも今後いろいろなことを知り、体験をしていく中で「かなえたい夢」の形は変わるかもしれませんが、あらゆる枠を飛び越えて、未来にはばたく「ラッキーガール」の姿が見えるようでした。



コトノハ出前授業の

ご案内

私たち言の葉協会では、

教育支援事業の一環として、

様々な方に「コトバと向き合う」をテーマに

「コトバとは何か」「コトバの大切さ」等の内容で

啓蒙活動を行っています。

